



タイトル：大森康正 イラスト：瀬尾理

## 会員リレーエッセイ

## 「行ってきました、チューボー会議」

富士常葉大学環境防災学部 重川希志依

ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、不肖重川は今年1月、中央防災会議の委員を仰せつかりました。ところが極めて非常識な私目は1月26日に開催された第1回目の会議を欠席してしまったのです。敬愛してやまない河田恵昭先生が常日頃からおっしゃっている「約束は平等公平に早いもの順ヤ！」のお言葉を素直に守ったのですが、欠席は私一人でした。

第2回目の会議は6月28日に開催されました。事務局から連絡を頂いた時「ええ～、ナマ小泉に会えるんだア」とまたもや非常識な言葉を電話口で吐き、内閣府の方をあきれさせたのです。会議は夕方5時から6時までの1時間、場所は首相官邸大会議室。同僚の小村隆史氏に「最寄の駅は丸の内線国会議事堂前です」と教えられ、出かけました。生まれて初めて入る首相官邸は結構薄暗くてプンとかび臭いような古い建物の匂いがしました。横長のテーブルに各委員が着席し、5時ジャストに会議は始まりました。私の斜め前に座った小泉さんは、テレビで拝見するより華奢な感じです。田中真紀子さんはテレビで見るより色白ですっきりきれいな方でした。

会議の中で私から話題提供をする時間を頂いていたので、5分間という限られた時間の中で、すまいの安全性を上げることの大切さ、市民の防災力を上げることの大切さを話しました。話し終わると小泉総理は「阪神・淡路大震災では住宅で9割の人が亡くなっているのか」と驚かれました。我々にとっては常識となっている情報なのに、それを最も知って欲しい方達にまだ伝わっていない事に愕然としました。会議は6時ぴったりに終了。黒塗りの車が委員を乗せて次々と官邸から出て行く中、私は地下鉄の駅を目指して霞ヶ関へと続く坂道をトコトコ歩いて帰ったのです。

(ペンを京都大学防災研究所の林春男さんにまわします)

## 目次 - 第7号 -

会員リレーエッセイ 「行ってきました、チューボー会議」 重川希志依	..... 1
第12回話題提供ダイジェスト	
「三宅島火山噴火災害～防災と被災者救済の視点から～」 早川由紀夫	..... 2
災害対応研究会オープンショップ・ダイジェスト	
パネル討論「21世紀の防災の姿をさぐる」(その2)	..... 6
事務局からのお知らせなど	..... 10



私は火山学と地質学を大学で教えております。今日は、三宅島の去年の出来事をお話しします。ここは大阪ですから、伊豆の島々、三宅島という遠い所と思われるかもしれませんが、ついこの間、4月8日、ここも臭ったのではないかと思います。普通は西風しか吹きませんから大丈夫なのですが、4月8日は大丈夫ではなかったのです。私はホームページに日記のようなものを公開して、4月10日に「本州を襲う三宅島の火山ガスの予知」という題で、4月8日の京都で環境基準0.1ppmの3倍にあたる0.3ppmだったと書いておきました。福井や岐阜ではずいぶん臭って通報がありました。

今、このようになることを東海村の原研がシミュレーションしています。それに関連して私がひとつ言いたいのは、火山ガスは予知できること、さらに関西まで臭ってきていることです。他人事ではなく、死人が出る可能性もあります。幼い子どもや年配の方、喘息の方は危険です。3時間続けて0.1ppmを超えるならば生命に危険が及ぶので環境省からアナウンスが出るはず。三宅島が他人事ではないことから、この話を始めています。

### 3000年ぶりのカルデラ形成ではないか

まず、事実関係をできるだけ冷静にお話ししたいのですが、いろいろと頭に血が上るかもしれません。

「三宅島2000年ファクト」の経過、つまり何が起こったかです。

6月26日夕刻に三宅島で地震が多発し、緊急火山情報が2時間ほどで出ました。そして翌朝海底噴火ということで一区切りつき、みんなほっとしたわけです。1983年以来17年ぶりでそういうことが起きて、三宅島の騒ぎはすぐ終わるだろうと思っていたのですが、様子が変わったのが7月8日の夕方、山頂で噴火があったので灰が降りました。

翌日の朝、NHKのテレビニュースで「昨日山頂噴火した三宅島の火口です」と、ただヘリコプターからの映像を見せました。NHKにはわからなかったのですが、その映像を千葉達朗（アジア航測株式会社防災部・日本大学非常勤

講師）という人が見て「これは大変なことだ」と。それまでは平らだったカルデラに、前日に大きな穴が開いたのです。

私も驚きましたが、でも、まだそのときは三宅島はすぐ終わってしまうという先入観がありましたから、次の日のホームページには「もう当分、20年くらい三宅島は噴火しないでしょう。いい名所旧跡ができたから大勢観光客が来ていいね」と書きました。私自身、楽観視していたのです。

14日にもう1回山頂噴火が起き、これから事態が変わってきました。少なくとも私はすごく青ざめてきて、14日のホームページには「3000年ぶりのカルデラ形成ではないか」と書きました。

実は私は18日まで知らなかったのですが、最も深刻なターニングポイントだったのが7月11日午後の毎日新聞の空撮です。つまり14日の山頂噴火の前の写真になりますが、斜めからの写真で判別がかなり難しいのですが、8日の夕方以降、少なくとも11日までさらに陥没が続いており、14日でもっと陥没したのです。噴火というより陥没ということが人知れず起こっていることに私は底知れぬ恐ろしさを感じたわけです。

私も学者ですからもう少し考えていまして、その陥没が毎日毎日、地質学的に言えばきわめて一定の速度で進行していることに5日後の11時20分に気が付いたのです。気が付くとすぐホームページに書くのですが、気象庁はまだ認めていないようでしたが、具体的には毎日2回くらいずつストーンストーンと沈んでいるらしい。沈んでいる量が1日当たり2000万トンくらいで、その量は前回1983年の噴火のときの噴出量に匹敵する。毎日毎日、前回の噴火でやったことを、23日の時点で2週間もやっている。余程穴が大きくなっていると予想し、その

後写真を収集したわけです。

最終的にはこれが40日間続きました。十何億トンの質量が地表から失われたのです。23日に私は公開し、25日に東大地震研究所の談話会があったのですが、私はただ聞きに行っただけ。その後気象庁で勉強会があって、ここで私と気象庁との接点が唯一あったのですが、ここで両者の対話が不十分だった。もっと言えば、私はこういうことを思っていたけれど、気象庁は「そういうことはない」とその場は終わった。私はさらにもう5日間考えて7月30日「三宅島中心火道」の断面図にいろいろ書き加えてホームページで公開しました。一部の研究者はこれにかなり関心を持って下さった。しかし、日本の火山防災を司る気象庁の見解と一部の学者、私ですが、その間に大きな意見の相違があった。私がインターネット上のホームページに勝手に見解を書いて、気象庁はそれをあまり見ないで放っておいた、と言えるかもしれません。

#### 島民感情と日本国民の認識にギャップ

8月10日に噴火がありました。7月14日から3週間ぶりに火砕流が発生しています。7月の段階では私は火砕流を認識しませんでした。8月10日の噴火で火砕流が発生していることを11日の朝に気が付いて書きました（この火砕流をずっと気象庁は認識しなくて、最終的には8月29日の夕刻に火砕流という言葉が言われることとなります）。

8月13日のJNNの「報道特集」で私はカメラの前でインタビューに答えました。ホームページに書くのは割りと簡単なのですが、テレビカメラの前で言うのはやはり、かなりの勇気がいります。決心して「これは3000年ぶりの事件であってとても大変なことだ」と答えました。

8月18日に今までで最大の噴火が起こっています。噴煙が上がって小石が降り、大きい岩が飛んできたということが起こります。この日は私は自分の研究室におらず、活動を始めた19日の朝、実は噴煙が15キロメートルまで上がっていたことに気付いた。気象庁発表は「8キロメートル以上」でしたが、NHKの報道では「噴煙8000メートル」となりました。8000メートルと15000メートルでは大きな違いです（これを気象庁は9月中旬に認めております）。

20日になって、小石が島内だけでなく太平洋にまで降っていることがわかって、車のフロ

ントガラスがめちゃくちゃに割れたり、大きな岩が都道にぶち当たっている映像が民放で流されましたが、NHKは一切出ていません。18日の大きな噴火で島民が震え上がってもうここには住んでいられないと思っているのだけれど、そういう気持ちが日本国民の共通認識にはならなかった。

象徴的なテレビニュースがあるので見て下さい。8月30日にテレビ朝日で放送されたものですが、27日か28日に取材されたと思われる。東京都応急対策課の井門課長という人がインタビューに応じています。

（記者） 都は全島避難は必要ないと言います。

（井門） それほど緊急性は、今すぐ必要ではないのではないかと考えています。従いまして、今の段階では直ちに避難することは考えていない。

（記者） 予知連はかなり危険性を訴えていますよね。

（井門） 言ってないですよ、危険性なんて。

（記者） いえ、噴石の部分です。

（井門） 噴石は、だからシェルターを設けたと言ったでしょう。

この後に三宅村長の映像が続きます。

（記者） 島民の皆さんを島の外に避難させたい、と東京都に要望されているわけですよね。

（村長） そうです。全ての島民を避難させるということで考えてはいるのですけれど。

三宅村の最高責任者である村長が避難したいと言うけれど、都がだめだと言っているわけです。東京都がそうだということは国も避難させないということです。再び井門課長へのインタビューが入ります。

（記者） どなたかが犠牲になられた場合、なぜ都が対応をとらなかったかと批判が上がったら、どういうふうにお答えになるのですか？

（井門） それはやはり、そうなったら東京都が甘んじてその非難を受けるということだと思うんですよね。だって念のためにやるというのは私財でやるわけじゃないんだから。税金でやるんだ

から、やはりバランスというものがあ  
るでしょう。

これ以外にもありますが、表立った  
ものだけでなく、テーブルの下でも激  
烈にいろいろあったわけです。

#### 日本を動かせると思った火砕流の写真

それで3回目の噴火である8月29日になる  
わけです。この日、噴火は4時半で5時10分  
に火砕流が発生しました。私はこの日、5時5  
分くらいに電話がかかってきて、5時15分く  
らいに大学に着いて活動を開始しています。

火砕流の下から島民の女性が千葉さんの掲  
示板に書き込みをしています。そこで私は5往  
復くらい会話しました。最初は彼女が何を言っ  
ているのかわからなかったのですが、苦しいと  
か、大変だという話から「濡れタオルを口に当  
てなさい」などと話したのです。

その後、5時50分になると火砕流が南側  
に行く。北側に行った火砕流と南側に行った火砕  
流、この両方の写真があります。

この日、ちょうど朝5時ごろ、千葉さんが東  
海汽船で三池港に着岸したのは判断ミスだっ  
たと思いますが、いずれにせよ下りた。その際  
の千葉さんの写真は彼のホームページの掲示  
板に置かれていますが、この南側のものは、だ  
れが何と言おうと火砕流です。下に三宅高校が  
写っており、真っ黒いものがもくもくと見え  
ます。これは雲仙と全く同じであり、この中に入  
れば高温で死んだでしょう。

11時に東京都が2か月ぶりに災害対策本部  
を設置します。政府が国土庁長官をチーフに非  
常災害対策本部を設置したのは午後2時です。  
その間にも私は島の方と掲示板の中でメール  
を通じてやり取りをして、ホームページで公開  
するなどしています。

私が、太平洋に火砕流が流れ込んでいる写真  
を三宅島の人からもらったのが12時ちょう  
どで、直後の12時6分くらいにホームページ  
に載せました。こんなに大きな写真を使ったこ  
とはその後ありません。この写真ならば絶対に  
日本を動かせると思って使ったのですが実際  
に動いたのです。私はすごく意識的にこの写真  
を前面に出して宣伝しました。

(ナレーター) 島で撮影された写真を(ホ  
ームページに)掲載して火砕流が  
海岸まで達したと報告し、即刻  
避難すべきと主張している。火  
砕流は熱風が瞬時に山肌を駆

け下りるという危険な現象。雲  
仙の普賢岳の大規模な火砕流  
では多数の死者が出た。しかし、  
別の専門家はこの写真につい  
て、火砕流の可能性が有るとし  
ながらも現地調査をしなければ  
危険の度合いは判断できな  
いとコメントしている。午前6  
時過ぎには、367世帯が停電、  
復旧作業に追われた。相次ぐ噴  
火は島のライフラインにも影  
響を与えている。

これに続けて農民のコメントが流れ「埃が風  
下に向かってるので、それも落とさなければ  
いけないので、やはりどうしても水が必要にな  
ってきますし、貯水池も農業用水の場所も噴石  
で壊れてしまった」とのんびりしてしまって、  
この1分間のニュースの前半と後半のトーン  
が全然違うのです。私たち専門家から見れば、  
もう一瞬でもあそこには行かせない状況なの  
に、マスコミは一生懸命取材をしているし、予  
知連の会長さんも情報がないために島へ行っ  
て住民説明会をしようとしているのです。

#### 避難指示前に島民の3分の2が避難

ここで言うておきたいのは、各社が勝手に私  
のホームページを使ったことです。確かに私は  
8月の終わりごろは頭に血が上っていて、ホ  
ームページに「知的財産権を全部放棄します。た  
だしクレジットは入れて下さい」と書いていま  
した。しかし、フジテレビは私のページを彼ら  
の持っているモニターに表示してそれをテレ  
ビカメラで写すという操作をやっていた。私と  
は無関係に引用しただけです。その後の民放も  
みんな同様で、このころ私はTBSの「報道特  
集」の方以外には個別取材に応じていません  
でした。

この日の17時50分に「火山観測情報199  
号」が出ます。この中に、気象庁としては多分  
耐え難いだろう4文字があります。「部外通報  
の結果によれば」というのがあって、彼らは火  
砕流を認めるわけです。この「部外通報」は何  
かという、島の北側で海に走った火砕流の写  
真です。それに加えて、千葉さんが撮った三宅  
高校の裏を流れている黒い煙の写真のことで  
す。

最終的に、翌朝30日にこの火砕流のカラー  
写真が「朝日」と「毎日」の一面に大きく載り

ました。それで世の中が動いたと思ったのですが、まだ、そうは問屋が卸さなかったのです。31日の予知連で統一見解が出て、その夜、石原都知事がマレーシアから帰ってきています。その夜の動きはよくわかりませんが、公になっている事実としては、9月1日11時45分から都の災害対策会議が15分間開かれ、12時から都知事が村民に対して島外避難の呼びかけをした。2日と3日と4日の東海汽船で避難せよということです。その間、東京都は3日に銀座から晴海にかけて「ピクレスキュー」という防災訓練をした、というような経過があります。

法的には、9月2日の朝に三宅村の村長が災害対策基本法第60条に基づく避難指示を出したことになっています。文書はないようですが、一応そういうことになっています。

三宅島の脱出者数に触れておきます。三宅島の皆さんは8月18日の大きな噴火で「ここは居る場所ではない」と思いはじめ、それ以降ずっと東海汽船で切符を買って出ていくわけです。石原都知事が避難を呼びかけた9月1日の時点で、すでに2500人が自分で出ていた。9月4日、最終的に3855人が島外に避難を完了したわけですが、知事の呼びかけの前に島民の3分の2の人は、自主的に切符を買って出ていたというのが事実です。

ところで、先程触れました三宅島測候所発表の「火山観測情報199号」の現物を私は見たことがありません。全部載っているサイトがあるのですが、199号だけ出てこない。私は、内閣府のページの、今でも置いてあるところから持ってきたテキストで見たのですが、これが199号全部かどうかは確認していません。

噴火予知連というのは気象庁長官の私的諮問機関ですが、気象庁と同じようなものです。国の火山監視の責任機関であるから、きちんとした情報収集をして分析をしないといけない。彼らがそれをしていたとは私には見えない。彼らは何らかの先入観を持っていて、長いことデータを眺めようとしなかったと私は感じます。もしそうであれば、そこは直してほしいと思います。

9月に学会で「なぜ緊急火山情報を出さないのか」と問い詰めましたら、その後気象庁の方が集まってきて私に尋ねることもありました。それで何らかの改善策は講じられておりますが、まだ十分とは言えません。

<お断り>

紙面の都合で「支援 VS 救援」と「防災ツ-

ルとしてのインターネット」の部分を割愛させていただきました。

林 ありがとうございます。若干の質疑応答の時間があります。どうぞ。

柳原 確認ですが、三宅島に測候所がありますね。測候所の職員がガスの臭いとか、気温が上がるとか、何か固有の状況から火砕流と判定できなかったのでしょうか？ 素人ではなく、プロがいたのにわからなかったのかなというのが素朴な疑問です。

早川 測候所員がいた場所で獲得できた情報から判断できないのはしょうがないと思います。外から全体像を見ないと私でも判断できないと思います。

三宅島測候所員は気象観測のプロであって、火山のことはトレーニングされていない。つまり、噴煙の高さが何メートルかを測ることはできるけれど、これが危険かどうかは判断できない。測候所はどこも同じです。皆さん技官の方ですから。

林 もしよければ「専門家の責任」というものをもう少し話していただけたら。

早川 火山学者のアカウンタビリティは社会に対して、つまり行政や住民に対してであることは論を待たない。それを果たしているかいないかという評価の問題になる。三宅島で経験するまで私はずっとそのように信じてきた。でも、いつも説明責任を果たしていればいいというものではないのだ、と思ったわけです。まだ、私自身であまり消化できていないのですが、私はこれまで学者バカで、説明責任だけ果たせばいいと思っていたのですが、個別的なことに至ると、それ以上に優先するものがある、という経験をしました。

柳原 行政サイドは、ある程度先生のご意見を受け入れなければいけないとわかっていても、それを公開するとマイナス効果が大きいと思うから抑えておけ、というようなことをやったのではないかと想像するのですが？

早川 「べき」と言われるとにわかには「うん」と言えない(笑)。私は東京都の対応とは違う考えであることは常に表明しますが、彼らが私のやり方に従うべきだとは思っていない。私は東京都に対して何か意見を申し述べたことは、ごく例外を除いてありません。

(文責 細川)

コーディネーター

林 春男 氏(京都大学防災研究所)

パネリスト

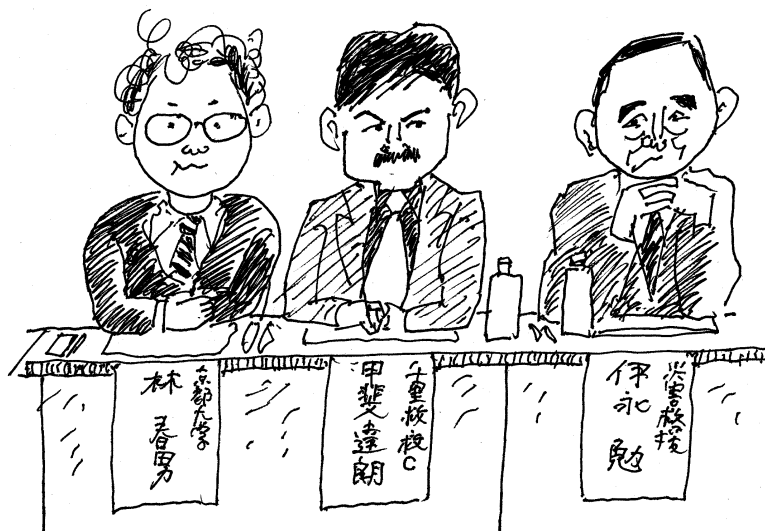
甲斐 達朗 氏(千里救急救命センター)

伊永 勉 氏(ADI 災害救援研究所)

重川希志依 氏(富士常葉大学)

立木 茂雄 氏(関西学院大学)

中地 弘幸 氏(神戸市安全公社)



兵庫県立舞子高校に環境防災科が誕生する

林 フロアの皆さんから5人のパネリストの方たちに質問でも、あるいは皆さんのお考えの紹介でもいただけないでしょうか。

Jさん 甲斐先生からドクターヘリの話がありました。現在岡山県とか静岡県で実験的に導入されていると聞いていますが、ヘリポートの問題だとか病院や消防署との連携、一番気になる平等性がどうやっていくのか、その辺のところはどうお考えでしょうか。

甲斐 日本では今は3カ所ですが、この4月から6カ所で、夜間は無理かもしれませんが、各医療機関にヘリコプターを置いて、採算がとれるのかどうかというパイロット事業が始まります。今回の岡山にしても、救急車では時間がかかるからヘリで短時間で運ぼうという発想なのです。ただ、その発想では永久に大阪ではヘリは飛ばないのです。

例えば奥尻島であれだけの津波がありましたが、翌日には必要な人はほとんどヘリで島から北海道内の病院に運ばれています。それは普段から過疎地対策として飛んでいたからです。大都市では、東京都は島や多摩地区などがあって飛んでいますが、他ではコストパフォーマンスは確かに難しいと思います。でも、ロンドンなどでは渋滞している道路に救急ヘリが飛んでいる実績もあります。

次の段階として平等性、公平性を考えたとき、同じように税金を払っているのに「なぜ私の地区では救急車を呼んで病院に行くのに30分以上もかかるのだ」という問題があります。ドイツなどでは法律が整備されていてヘリコプターによる搬送が盛んだと聞いていますが、僕は、税金を払っている人がどこまで文句を言うか

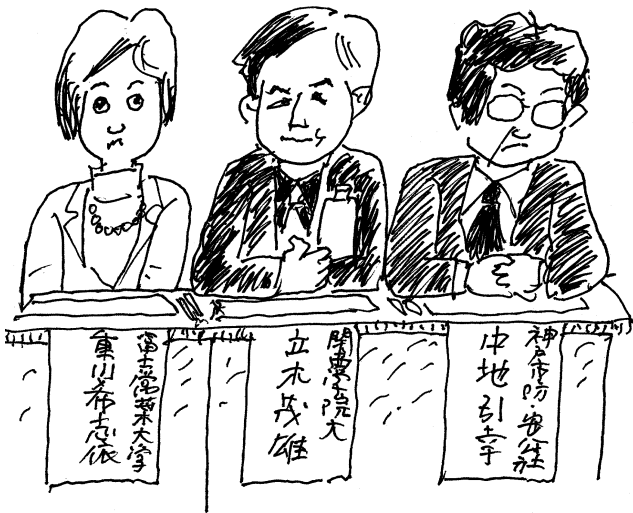
ではないかと思います。行政はそれに応える義務があると思います。

林 ありがとうございます。ほかにフロアからございませんか。

Nさん 県立舞子高校のNと申します。当校では2002年に環境防災科というのできるようになっております。今、先生方の2010年のお話を伺っておりまして、私たちが今一生懸命取り組んでいることが間違いではないと思いました。つまり、いろいろな災害を、大学など特別な所だけではなく、もっと住民がやっていくということになりますと、高校生やもっと若い段階からやっていかなければならない。現在はカリキュラムを検討している段階なのですが、高校生から全国に、そして世界に発信できるように、また、その高校生がやがてそれぞれの進路で、あるいは地域に帰って役立てるような、そんな人づくりに取り組んでいきたいと思いました。これからの私どもの活動に対しまして多くの方々のご支援、ご協力をぜひお願いしたいと思います。

林 N先生にご質問したいのですが、実は私にも高校生や中学生の息子がいて、もっと小さくて、体力的にもこっこのほうが強いうちから教育すべきだったのかと考えたりするのです。高校生からでも、教育すればちゃんと伸びていくと考えてよろしいでしょうか？

Nさん 私も、自分の子どもに対してはなかなかうまくできません。ただ、私はずっと高校で教えてきましたが、世間でいろいろ言われていますが、ほとんどの子どもは、真面目に人の悲しみや苦しみをちゃんとキャッチできます。17日にも本校の生徒や隣の中学校の生徒で大きなイベントをしたのですが、中学生の様子を見ていても大変真剣ですし、みんなの悲しみや苦



しみを受け止めるだけのものを持っている。やはりそれを信頼していかないといけないと思います。

林 もうひとつお聞きします。頭ごなしに言われたら反発するのは当たりまえですが、では、若い人たちの力を伸ばすときに、情報の出し方というか、何を教えていくのがいいのか。市民の防災力を上げるためには彼らに期待しなければならない。確かに悲しみや苦しみを共感してくれるのが第一歩だと思うのですが、もうひとつ、こちらが何に力点を置いてどんな形を出していくといいのか、N先生の同僚の先生もいらっしゃるようですのでお話いただけますか。Nさん ひとつだけ申し上げますと、知識偏重ではなくて、もっと体験とか、自分たちで体を動かしたりということが大切だと思います。先程、自己責任という言葉もありましたが、自分たちで考えて行動させるということが必要だと思います。

Mさん 舞子高校のMです。いろいろな行事をやっていて、生徒が直接かかわって何かをした、自分たちが動いたことで何かが少しずつ変わると、すごく達成感とか成就感をもち、参画意識が強くなっていきます。一度そういう経験をする、次の行事に参加することにも躊躇がだんだんなくなってくる。そのうちに「こういうこともやろう」と主体的な動きも出てきます。それが、住民の防災力とか自治というものにつながっていくのではないかと考えています。

#### 住民の社会活動の変化と専門家の役割

林 今の発言を受けて、自己責任派お二人に「なぜ」というところも含めて少しレスポンス

を。

立木 社会運動とか社会活動が今までの日本でどう捉えられてきたのかを振り返ってみると、60年代の社会運動は「反対」というのがキーワードだったと思うのです。70年代には「コミュニティ」という言葉がはやりました。ところがコミュニティ運動の中身は住民の側が行政に「あれを作ってください。こういうお金を付けてください」と、実際のキーワードは「陳情」だったと思うのです。

それが80~90年代になって「参画」というような、今、舞子高校の先生がおっしゃったような言葉がキーワードになる。そして市民の側から代案を提示する、そういったことが実際に行われるようになってきた。阪神・淡路大震災のような非常に大きな出来事があって、単に参画して代案を提示するだけではなくて、市民も行政と「協働」していこうではないかというようなことが言われるようになった。協働するというのは参画する市民も責任を担わなければいけないわけです。

僕は、参画や協働の次にくるものは「自治」だと思います。今は財政赤字が問題になっていますが、おそらくもっと増えていくでしょう。利払いに税金が食われて、行政は公共的なサービスの実施主体ではあり得なくなっていく。中地さんもおっしゃっているように、サービスを外注していくことを既に行政は始めています。2010年からそうなるということではないにしても、自分たちで企画し、公共的な事業を行う、それに必要な資材や資金は大きな財団としての政府から得てくる、そういったことが、志のある市民がいる所ではできる。そうでない所は全く他人任せで混乱し、防災力も非常に弱くなる。そういったことが起きてくるだろうと思います。

伊永 行政は税金で賄われています。けれども私は国民全部、税金の代わりに払えるものはあると思うのです。学生とか無職の人とか子どもたちも地方行政職員に代わる仕事ができます。落ちていたゴミを拾うこともそうですし、知恵を出すとか、持っているノウハウを提供するのもいい。要するにパブリックのをお手伝いする、力を出すというのは皆ができることです。それが当たりまえになった時代にはボランティアという言葉はいらなくなって、市民防災力という大層なテーマも不要になるのが本当だと思うのです。

林 立木先生、この今の日本で、いきなり自治でいけますか？

立木 参画とか責任というのは、結局「我がこ



と」と思えるかどうか根本にある。

C S神戸というNPO団体がありまして、そこが今年やろうとしているのは市民発電ということです。街角に発電パネルを設置しまして、発電したものでエコカーに充電する。そのエコカーを山手と海手の交通手段として使おうという発想です。行政もお手伝いはしていますが、市民の発意で発電事業までやってしまおうということが現に起こっていて、この主体は若い世代の人たちです。それを支えてすごい戦力になっているのが、ベテランズと言われているような大企業の管理職だった方たちと、30~50代の女性の方たちです。もう、先鋭的に自治までいこうとしているのではないのでしょうか。

林 もうお一人、自己責任型でご説明いただいた重川さん、何かありませんか？

重川 今のベテランズが単純にすごい市民力にならない場合もあります。先日たまたまある県のボランティアの方たちと話していた中で「市役所職員のOBが作っているボランティアの会が一番困る」と聞きました。地方都市ですから、市役所に勤めていた人たちはエリートなわけです。彼等がリタイアして災害ボランティアに加入しているのですが、会議などで権利は主張するけれども代替案は出さない、文句は言うけれど手は動かさない傾向があるらしいのです。これはひとつの例ですが、こういう人たちとうまくやっていくにはもう少し工夫がいるのかと思います。年齢とか性別を問わず、皆が生き生きと参加してくれるプログラムは何かというと、それらの人の好奇心をそそるようなことを考えなければいけないと思います。

もうひとつは、参加とか協働とか自治で市民が賢くなるということは、行政にとっては結構厳しいところがありまして、行政の質とか姿勢が逆に問われるようになります。お互いに本音で何が必要なのかを突き詰めて付き合っていないと、賢くなった市民が「あほらしい、やめた」と後戻りしてしまうのではないかと。とりわけ住民と直接に接する市役所とか消防という方たちの姿勢とか質を高めていくことが、今すごく必要なのかなと思っています。

林 賢くなるというのは結果ですよ。その賢くなる手段として、例えば計画への参加だとか、活動として自分で裁量するとかがあると思います。その活動を続けるドライビングフォース、その力になるようなものに、知的好奇心の満足だとか、周りの人に喜んでもらえるみたいなものがある、そういうふうに解釈していいですか？

重川 はい、結構です。

林 それは、阪神間でもそうですか？

立木 だいたいそうだと思います。林先生の話を受けて、いわゆる防災の専門家は何かをするのかということにも関わってくると思うのですが、住民の方が知識を共有化し、草の根で問題解決をしようとワークショップが各地で盛んに行われるようになりました。ただ、このワークショップにはひとつ難点がありまして、当事者だけでやっているとなると業界言葉で言う「這い回る経験主義」に陥ってしまう危険性がある。そういうときに、きちんと知識、技術を持っている方が必要な情報を提供することによって、這い回っている中から一歩ポンと先へ跳ぶことができる、そういう役割はとても大事なのです。

重川さんのお話にあった知的好奇心にも、それをすばらしいと褒めてくれる人、励ましてくれる人が必要で、場合によっては必要な知識、情報を提示する役割を専門家はこれから担っていかねばいけないのではないかと思います。

#### 住民と行政と企業の連携で地域を考える

林 せっかく「専門家」というキーワードがまた出てきましたので、甲斐先生、お医者さんもプロとしての本当の能力が問われるような時代になってくると思うのですが、今の話とつながりますか？

甲斐 住民が防災に意識を持つということと医者が災害に意識を持つのと全く同じなのです。普通一般の医者から言えば、災害は全然興味がない。例えばこの会場に消防や防災に関わっている人はおられますが、医者や医療対策の人はいないと思うのです。それが現実なのですが、ただ、僕は世の中が動くのは知識などという恰好いいものではなく、お金だと思んです。

今、医者の数は人口比でそこそこ満足されているのですが、10年後、かなりの数の医者が余るのです。開業医の指向はだんだん減っていて、大病院で働きたいという考えの医者が増えていきます。そうになると、単純にポストがなくなります。ポストがなくなったら探さないといけない。今、医療行為をやっているのは当然医者だけですが、消防のほうで、救急救命士は医師の指示によって点滴とか、電氣的刺激を与えて心臓を動かす除細動という処置をやっています。アメリカはもっと進んでいて30種類以上の薬も使えます。いずれ日本もそうなります。そうになると、おそらく先程ちょっと触れたように医者が消防で働くようになると思います。医



療行為を行う組織に医者がいないのはおかしいし、いわゆるプレホスピタル、つまり病院で治療を受ける前の段階から医者が関わるようになると思っと思っています。

林 中地さん、消防サイドから見て今の話はどうですか？ 個人的見解で結構ですが。

中地 現在の消防職員の立場から言えば、火を消している者、救急車に乗っている者、中でも救急車に乗り続けて経験を積み、国家試験を受けて救急救命士の資格を取っている者の考えはどうでしょうかね。もし、甲斐先生がおっしゃってるようなことを消防が許容しようとするれば、救急業務と火を消すという部分を分けないとシステムとしては難しいと思っっています。

林 東京消防庁の細川さん、どうですか？

細川 お医者さんが消防職員になって一緒に救急車に乗るといことになると、中地さんご指摘のような問題も起きてくると思っっていますが、ドクターが救急車に同乗するシステムをどう作るかといことだけなら話は別で、私は将来的にはお医者さんも救急車に乗るようになるだろうと思っっています。

ただ、このパネルが始まる前にも甲斐先生とお話していたのですが、東京消防庁は組織が大きいので比較的スムーズにシステムができると思っっていますが、規模の小さな消防本部の場合などはその前段として広域消防を考えると、別の仕組みが必要になると思っっています。

林 フロアからご意見があればどうぞ。

Sさん 宇治市役所で防災を担当しているSと申します。私はこれまでのお話を伺いながら市役所の役割といことを考えてみました。

市役所は市民の方に知恵を与え、情報を与え、意欲を与える必要があるのではないかと思っっています。

まず、知恵といのは知識の共有化といことで、これは価値観の共有化でもあると思っっています。ですから一種の防災文化としたいと思っっています。こいう市民の方が増えてきますと防災は大事だと思っただけようになり、自分の安全は自分で守るとい意識も強くなってきます。ただ、町内会などに呼ばれて感じるのは、若い方はおられなくて、比較的高年齢の方が多いいという現実があります。

情報を与えるといことですが、活断層の位置についての問い合わせがここ2～3日で10件くらい入りましたが、市民の方が関心をお持ちのことについて市役所が情報を伝える必要があると思っっています。情報を共有していれば行動も揃ってきますし、それが防災の力になるのではないかと思っっています。

最後に意欲についてですが、宇治市ではやはり自主防災といことを一番重点に考えておりますが、現状は補助金を与える防災になっている面があります。ボランティアであるとか、図上訓練などを実施して、実際に市民の方が率先して防災に取り組んでいけるように工夫する必要があると思っっています。

Tさん 東京ガスのTと申します。企業サイドからひとことだけ言わせていただければと思っいます。今までのお話を伺っていると住民と行政で話が完結しそうな雰囲気なのですが、実は企業もこれから両者とうまく連携をとっていかなければいけないのではないかと最近感じています。

災害対応には事前と事後の対策がありますが、企業はそれを自己完結的にやろうといのが今までの傾向だったように思っいます。しかし、住民も企業も被害を受けるのですから、企業が住民あるいは自治体に協力できること、あるいは逆にしてもらいたいことあるのではないかと思っのです。こいう意味では、これからもっと三者の協力体制が必要なのではないか、いことを感じています。

林 ご指摘いただいたことは本当にそうだと思っいます。21世紀を考えていくとき、企業はコーポレート・シチズンとい地域の重要な構成員ですから、いろいろな形での相互提供が必要になるだろうと思っいます。

さて、論議は尽きませんが、これでタイムアップにさせていただきます。パネリストの皆さん、ありがとうございます。それから、フロアから発言してくださった皆さん、熱心にこんなに遅くまで残っていただいた皆さんにお礼の拍手でお開きにしたいと思っいます。

最後に「また来年もやりましょう！」

(文責 細川)

<お断り>

会員以外の方の発言はお名前を記号で表記させていただきます。

## 事務局からのお知らせ

お暑うございます。池田、明石と近くで「危機管理」事案が連発しています。いろいろ考えるべきことも多いかと思えます。

さて、年度始めに、本年度の第4回目の研究会を昨年度と同じように「災害対応研究会オープンショップ」として開催したいとお伝えしましたが、その期日が決定しました。平成14年2月14・15日の両日、神戸国際会議場で開催します。昨年同様、神戸市の震災対策技術展の一企画として「比較防災学ワークショップ」と連動させて開催したいと思えます。ぜひとも両方にご参加いただけますようお願いいたします。

また、来年度の話題提供者を考え始める時期になりました。阪神淡路大震災の災害対応の教訓を伝えてくださる方、新しい研究成果を紹介して下さる方、ぜひとも仲間に加えるべき才能等々、お気づきのことがあればお教えください。(林春男)

## 次回の定例会のご案内

と き：平成13年10月26日(金)  
14:00~17:00

と ころ：関電会館  
(大阪市北区中之島3-3-22 関電ビル内)  
Tel 06-6441-6800

内 容：ロボカップレスキューを学ぶ  
話題提供者：

北野 宏明氏  
(ERATO 北野共生システムプロジェクト 総括責任者)  
田所 諭氏  
(神戸大学工学部)

## いんぷおめーしょん

第3回日本災害情報学会研究発表会

日 時：平成13年11月1日(木)~2日(金)  
場 所：関西大学100周年記念会館  
(大阪府吹田市山手町3-3-35)

日 程：11月1日(木)  
午前 研究発表  
午後 研究発表  
11月2日(金)  
午前 研究発表  
午後 総会・シンポジウム・懇親会

締 切：参加申込 8月15日(水)  
研究発表テーマ申込 8月15日(水)  
研究発表論文提出 9月30日(日)

テーマ申込、論文提出先：

日本災害情報学会東京支部(松尾・中村)

(東京都中央区日本橋本町4-9-11 第9中央ビル建設技術研究所サテライト内)

Tel: 03-3663-6890

Fax: 03-3663-6888

E-mail: tokio@jasdis.gr.jp

参加費：学会員1000円、非学会員3000円

なお、同会場にて11月3日(土)は、日本自然災害学会20周年記念シンポジウムが行われます。

### UMEKUSA

下らなく過ごしても一生、苦しんで過ごしても一生だ。苦しんで生々と暮すべきだ。(志賀直哉)/一生を書斎で暮した男に、人生が判ってたまものじゃない。(中村真一郎)/この人生において私たちは絶えず得て絶えず失い、また失って絶えず得ようとし、それが生きることだ。(野上弥生子)/人生はつくるものだ。必然の姿などというものはない。(坂口安吾)

## 編集後記

梅雨入りした途端に暑くなったものだから、若くない私はすぐに夏バテし、そのせいか夏風邪をひいてますます体調を崩しました。見かねた同僚が病院を予約、強制的に検査を受けさせられ、クタクタになった私が炎天下を歩いて職場に戻ると、私の入院を信じて疑わなかった仲間に呆れられました。東京では雨など降らなかったのに気象庁は梅雨明け宣言、世間はズーッと猛暑続きに変化なしです。老体には栄養と休養だ、とわかっているのですが、どちらも不足。(けん)

毎日毎日、感心するほど暑い日が続いています。このストレスは私だけでなく、我が家のバルコニーに置かれた草花(ミニトマトや大葉など)もかなりまいっているようです。しんなりした姿を見て、「大変大変!」とあわてて水をやりますが、その心は「かわいそう」だけでなく「食べられなくなる」という危機感であることにふと気づきました。食意地がはっていることは百も承知でしたが、改めて思い知らされました。(ふー)

## 災害対応研究会

事務局：京都大学防災研究所巨大災害研究センター  
〒611-0011 京都府宇治市五ヶ庄  
TEL 0774-38-4280 FAX 0774-31-8294

ニュースレターに関するお問い合わせ：  
細川顕司 TEL 03-3441-0119  
青野文江 TEL 03-3682-1090